

冷徹社長の溺愛契約

〽年下秘書は逃げられない〽

前編 試し読み

にやむ書房

Chapter I 辞令

冷房の効いたオフィス。夏季賞与支給日の午後、誰もが少し浮かれた表情を浮かべている。そんな中、橘ひなだけが違っていた。人事部長に呼び出された時、何の前触れもなかった。

「橘さん、来月から神崎社長の専属秘書に」

乾いた声。ひなの思考が停止した。

「え……神崎社長の、ですか？」

「ええ。突然で申し訳ないが、君の能力を見込まれたんだ」

神崎颯。若くしてこの大手企業「神崎コーポレーション」のトップに君臨する男。社内では「鬼社長」の異名で恐れられ、過去に二人の専属秘書が辞めていったという伝説の持ち主。完璧主義で情に訴えることは一切ない。冷徹そのもの。

「な、なぜ私が……」

「社長ご自身が君を指名した。断るわけにはいかないだろう」

人事部長の言葉に、ひなは言葉に詰まった。断るなど、とうていできることではなかった。だが、不安で胸が締め付けられる。二十六歳、入社四年目の自分が本当に務まるのか。

翌月一日。ひなは深呼吸しながら最上階のエレベーターに乗った。ドアが開くと、ひらりと風が舞う。静寂だけが支配する空間。社長室のドアをノックすると、中から冷たい声。

「入れ」

ひなは重いドアを押し開け、一步踏み入った。窓辺に立つ背中。颯は都市の眺めを背にして振り向く。切れ長の目が、ひなをまっすぐに射抜く。

「時間通りだ」

「はい。神崎社長、本日より秘書業務を担当することになりました、橘ひなです」

頭を下げる。指先が震えているのに、ひなは必死に隠した。

「あげて」

静かに命令される。ひなは顔を上げる。颯は机の向こう側から、一步、ひなに近づいてくる。無機質な空気。でも、その眼差しに、何かを見つめられているような感覚があった。

「私の要求は二つ。完璧な準備、そして私の言うことへの絶対服従。わかったか」

「は……はい」

小さく声が出る。その声に、颯の口元が微かに動いた。満足なのか、冷笑なのか、わからなかった。

「まずは今週のスケジュールを。これまでとは違う、私のやり方で」

颯は自分の席に戻った。ひなは慌ててファイルを開く。完璧に準備してきたはずのスケジュール帳。だが、颯の要求はそれをはるかに超えていた。

「ここ、五分詰めろ」

「この会議、前倒して調整しろ」

「この資料は今夜中に」

次々と命令が飛んてくる。ひなは必死にメモを取る。終業時刻を過ぎても、ひなの仕事は終わらない。周りの社員は既に帰宅し、オフィスはひな一人のものになった。

空気が少しだけ和らぐ瞬間、颯の声が響いた。

「まだか」

「あ、すみません、あと少々……」

手が震えて、ペンが思うように動かない。そんなひなの手元を、颯がじっと見ている。

「水、一杯」

突然の言葉。ひなはハツとして席を立った。給湯室でコップに水を注ぐ。その時、鏡に映る自分を見て、ひなは息をついた。顔は真っ赤で、髪は少し乱れ、目には不安が宿っている。

「失礼します」

社長室に戻ると、颯は窓辺のソファに座っていた。さっきまでの緊張感がどこかへ消え、少しリラックした様子。

「そこに置け」

ひなはソファのテーブルにコップを置いた。その瞬間、颯がひなの手首を掴んだ。

「きゃっ」

思わず声が漏れる。体温が伝わってくる。颯の指は長く、力強い。

「腕、細いな」

言葉が出ない。颯はひなの腕を指でなぞるように撫でた。その感触に、ひなの体が震える。逃げたいのに、逃げられない。瞳が合う。颯の目に、初めて見る感情が渦巻いている。それは好奇心のようでもあり、所有欲のようでもあった。

「……離しますか？」

やつのことで絞り出した声。颯は静かに手を離した。解放された瞬間、ひなは後ずさる。胸が高鳴っている。

「……今日は、終わりだ」

颯は立ち上がり、自分のデスクに向かった。まるで何もなかったかのように。だが、ひなの手首には、まだ彼の指の感触が残っている。

「明日の朝、八時。遅れるな」

短い言葉。ひなは小さく頷くと、社長室から出た。ドアの向こうで、ひなは壁に寄りかかった。息が苦しい。今日一日、自分が何をしたのか。でも、はつきりしていることが一つある。鬼社長と呼ばれる男は、想像していたのとは違う、ということ。冷徹な仮面の下に、何かが隠されている。そして、自分はその一部を見てしまったのかもしれない。

翌日、ひなは五分前に社長室に入る。颯は既にデスクについていた。昨日と同じく、無表情。だが、ひながお茶を淹れた時、颯はそれを一口飲むと、小さく頷いた。それだけのこと。でも、ひなには褒められたような、不思議な感覚があった。

三日目。ひなは颯の要求にだんだん慣れてきた。完璧でなくても、颯の意図を素早く読み取り、先回りして準備できるようにになっていた。そんなひなに、颯は何かを感じ取ったのか、新たな命令を下した。

「来週、大阪出張。同行しろ」

「はっ……？」

「問題があるか」

「い、いえ……」

突然の命令にひなは混乱する。出張。二人きり。それだけで、ひなの胸がまた高鳴り始めた。

Chapter II 洗礼

「準備は万全にしろ。一つの抜かりもないように」

「はい！」

固く答える。ひなは自分の感情を必死に抑え込んでいた。不安と、どこか期待のような気持ち。混ざり合った感情が胸を駆け巡る。鬼社長と呼ばれる男の専属秘書。その日々は、始まったばかりだった。

出張当日。ひなは朝早くから颯のスケジュール再確認、持ち物チェック、資料の最終確認を何度も繰り返した。完璧主義の颯に指摘される隙は一つも残したくない。だが、それでもどこか不安で、胸が高鳴るのを抑えられなかった。

「橘、時間だ」

朝八時きっかりに、颯が現れる。紺のスーツに身を包んだ姿は、いつもよりさらに気迫が増しているように見えた。ひなは心の中で一呼吸置いてから、笑顔で応じた。

「はい、神崎社長。準備はすべて完了しております」

颯はひなの様子を一瞥するだけで、何も言わずに歩き出した。待たせておいたリズムジンに乗り込むと、ひなは颯の隣の席に座った。狭い空間。隣にいる男の体温と、微かに漂う優雅な香りに、ひなは意識をとられる。

「この件、先方に連絡しろ」

「はい。すぐに」

「会議資料、最終版か」

「はい、先ほど最終確認を済ませました」

颯の質問攻めは延々と続く。一つでも答えに詰まれば、冷たい視線が送られる。ひなは必死に対応する。だが、颯の要求は、ただの質問ではなかった。彼はひなの能力、ひなの考え方、ひなのすべてを試しているように感じられた。

新幹線に乗り換えると、ひなは窓側の席に座った。颯はその隣。走る景色を眺めるひなの視界の隅に、颯の横顔が映り込む。凜とした輪郭。長い睫毛。無表情だが、その顔立ちだけでも、ひなの胸が小さく跳ねる。

「……疲れたか」

突然、颯が声をかけた。ひなはハッとして彼に向き直る。

「いいえ、全然。大丈夫です」

「その顔、大丈夫じゃない」

「……え」

ひなは思わず自分の顔に触れる。緊張でこわばっていたことに気づく。颯は小さくため息をついた。それは苛立ちのようにも、どこか別の感情のようにも聞こえた。

「無理するな」

短い言葉。だが、その声には、昨日までとは違う温度が感じられた。ひなは何と返事をすればいいのか、わからない。ただ、颯の目を見つめてしまう。彼の目が少しだけ柔らかくなったように見えた。そんな感覚。彼なりの気遣いだろうか。それとも、ただの気の迷いだろうか。

大阪に到着し、会議を終え、ホテルに到着したのは夜の七時過ぎだった。疲労でひなの体は重かったが、心はそれ以上に疲弊していた。颯の完璧さ、そして時折見せるその表情の隙間。どちらも、ひなにとってあまりにも重くて、深すぎた。

「橘。九時にラウンジで」

チェックイン後、別々の部屋へ向かう途中、颯が言った。

「はい。何かございましたか？」

「明日の最終打ち合わせだ」

「かしこまりました」

ひなは自分の部屋に入り、スーツの上着を脱いでベッドに倒れ込んだ。ああ、疲れた。でも、まだ終わらない。ひなは立ち上がり、鏡の前に立った。疲れた顔。少しだけ乱れた髪。でも、それ以上に、胸にあるのは戸惑いだった。

鬼社長と呼ばれる男。その仮面が少しずつ剥がれていくような、そんな感覚。そして、自分がそれを引き剥がしているような。そんな思いが、胸を締め付ける。

九時、ひなはラウンジに向かった。静かな空間。ピアノの音が流れる。颯は窓際のテーブルに一人で座っていた。夜景を背景にしたその姿は、まるで絵のようだった。ひなは静かに近づき、椅子に座った。

「お待たせいたしました」

「待っていない」

短い言葉。颯はテーブルの上のファイルを閉じると、ひなをじっと見つめた。

「……疲れた顔だ」

「いえ、大丈夫です」

「嘘つき」

言葉に詰まる。颯はそんなひなの顔を見ると、不意に笑った。それは初めて見る笑顔。硬い表情を割って差した、温かい光。ひなは息をのむ。

「なぜ、俺のそばにいる？」

突然の問いかけ。

「……それは秘書としての勤務ですから」

「それだけか」

ひなは答えられない。違う、と。ただの勤務だけでは、この胸の高鳴りは説明できない。でも、そんなことを言えるわけではない。

颯は立ち上がると、ひなの隣に座った。間を詰められた。香水の香りがする。颯の体温が、ひなの腕に伝わってくる。

「君が俺のそばにいる理由を、俺が教えてやる」

「え……？」

颯はひなの顔を指でなぞった。その指の先が、唇の上を滑る。ひなは思わず目を閉じる。呼吸が乱れる。

「俺のそばにいろ」

静かに、しかし、強い意志で言われた。

「……はい」

小さく、でも、はっきりと答えた。胸が跳ねる。これが契約の始まり。ひなはそう感じた。

颯はその指をひなの顎に沿って首筋へと滑らせた。ラウンジの静かな空気が、急に重くなる。ピアノの音だけが、まるで他人事のように流れている。

「俺の言うこと、何でも聞く？」

「……え……？」

「聞けないなら、今ここで終わりだ」

「……聞きます」

ひなは顔を上げ、颯の目を見つめた。彼の瞳の奥に、深い何かが渦巻いているのを見た。欲望。そして、求める何か。

「いいだろう」

Chapter III 初夜

颯は立ち上がった。ひなもすぐに後を追う。二人はエレベーターに乗り込む。閉ざされた空間。無音。ただ、壁に映る二人の姿だけが、静かに佇んでいる。

ひなは自分の指先が震えているのに気づく。不安か、期待か。あるいは、その両方か。

エレベーターが止まり、ドアが開く。颯の部屋へと続く廊下。ひなはその背中を、一步遅れてついていく。

カードキーが「ピッ」と音を立て、ドアが開く。颯は部屋に入ると、ひなの手を引き込んだ。ドアが閉まり、「ガチャリ」と重い音が響く。

世界から隔離された。

颯はひなを壁に押し付け、その唇を奪った。柔らかい感触。ひなは思わず目を閉じる。甘い吐息が混じり合う。最初は優しかったが、次第に、そのキスは激しくなっていく。舌が、ひなの唇をなぞるように求めてくる。抵抗する間もなく、ひなは口を開いた。舌が絡み合う。甘い唾液の味。ひなは全身の力が抜けていく。

「ん……っ……」

ひなから、思わず喘ぎ声が漏れる。その声に、颯はひなの口元から唇を離れた。荒い息をするひなを見て、颯の口元が微かに緩む。

颯はひなの体を反転させた。壁に向けて。